

セルリーの播種期生態

川崎重治・田中 誠・三好芳彦
(佐賀県農業試験場)

KAWASAKI, S., TANAKA, M. and MIYOSHI, Y.
On the Differences of Ecological Aspect by the
Seeding Periods on the Celery

セルリーの消費は年々急増し、しかも周年供給の要求度が高いので、作型と栽培様式を確立する企図から、平場地の本場と標高400mの山間地において、1961年以来本試験を実施してきたのでその概要を報告する。

試験方法

コーネル619号とユタ15号を供試し、1月から7月まで連続播種し、慣行によつて栽培し生態的な変化と収量、品質などを調査した。気象条件は平場地は平均気温15.8°C、降水量1,776mm、山間地は13.2°Cでとくに夏期間の気温の日変化が大きく、年間2,319mmの多雨地帯である。

試験成績

病害の発生 (第1表)

第1表 発病及び抽苔調査

品種名	試験場所 播種期	本場 (平場地)				三瀬 (山間地)			
		心腐病 %	葉枯病 冊	軟腐病 欠株	抽苔率 %	心腐病 %	葉枯病 冊	軟腐病 欠株	抽苔率 %
コーネル六一九号	1. 15	3.5	—	0	18.6	0	—	0	13.2
	2. 15	5.3	—	0	6.0	0	—	0	23.3
	3. 15	—	冊	43.8	0	—	冊	3.3	6.6
	4. 15	—	冊	44.5	0	3.3	冊	13.3	0
	5. 15	—	冊	32.8	0	0	冊	0	0
	6. 15	—	冊	カ35.7 対50.0	0	0	冊	0	0
	7. 15	—	冊	0	—	0	冊	13.2	0
ユタ一五号	1. 15	7.2	—	0	0	0	—	0	26.6
	2. 15	6.0	—	0	0	0	—	0	0
	3. 15	—	冊	25.0	0	23.7	冊	3.3	0
	4. 15	—	冊	22.3	0	43.7	冊	0	0
	5. 15	—	冊	29.7	0	0	冊	0	0
	6. 15	—	冊	カ19.6 対45.5	0	6.6	冊	16.7	0
	7. 15	—	冊	0	0	0	冊	0	0

カ=寒冷紗被覆区 対=対照区

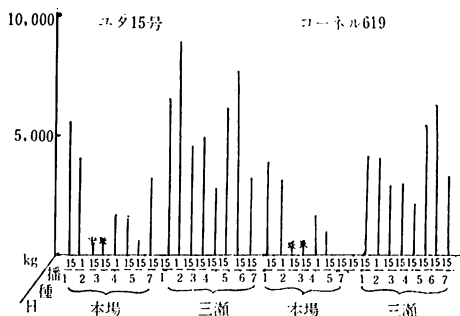
収量や品質に直接反映する葉枯病や腐敗病の発生は、生育期が25°C以上の気温に遭遇する場合に多く、とくに3~5月蒔は猖獗を極めて収穫に至らない。この様な傾向は平場地ほど強調される。とくに腐敗病は高温多雨の気象条件下で激しく発病し、栽培の

可否を決定する要因となる。品種間ではユタ15号が強い抵抗性を持ち合わせるので、発病し易い環境下での栽培に適當ではあるまいか。

抽苔...ユタ15号よりもコーネル619号が感温性が高く、早蒔の場合に抽苔し易いので、低温期の育苗には注意せねばならない。

収量 (第1図)

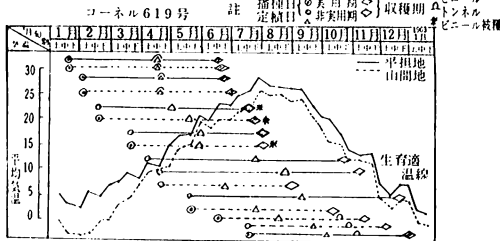
第1図 収量調査 (10a 当り)



平場地に較べて山間地の場合に著しく増収するのは、山間地の特異な気象条件に基因するものと思われる。

播種期別では、生育後半から収穫期にかけて生育適温とみられる10~20°Cの範囲内に入る作型、即ち、適温期間の長い平場地の1~2月上旬蒔と、山間地での2~3月蒔と5~6月蒔が生育が旺盛で病害が少なく、経済収量が得られる。平場地の2月中旬以後6月

第2図 播種期と収穫期並びに温度との関係



までと、山間地の4月蒔は高温と発病のために収穫は期待できない。

利用茎数と品質

収量と同様な傾向で、発育適温期間の長い作型が第1節間ののびがよく、しかも茎数が多く、肉質や風味が優れ、とくに山間地産は独特の食味と香気を持つ優品が得られる。

平地の場合、1～2月上旬蒔は良品が得られるが、他の播種期では商品性が劣り、肉質がよくない。

ス入り現象は収穫期が25°Cを越える場合に多く発現し、乾燥を伴うとさらにその傾向が強調される。

高温多湿時のビニールの遮弊効果(第2表)

第2表 ビニール被覆による遮弊効果
発病調査

試験年次	区名	軽腐病	黒心腐病	葉枯病
1962年	ビニール被覆区 対照区	0.9% 27.8	61.4 44.8	少 多
1963年	ビニールハウス区 対照区	0 0.2	0.4 0	少 中

収量調査

試験年次	区名	総重	株当たり調整重	a 株当たり調整重	利用茎数 15cm以上 10～14.9cm	草丈
1962年	ビニール被覆区	g 1,170	g 1,020	k 213.8	本 13.2	cm 2.1
	対照区	1,036	875	107.9	10.8	2.7
1963年	ビニールハウス区	1,084	929	416.6	11.2	2.2
	対照区	732	587	263.6	10.0	2.6

品種コーネル619 3月1日播

収穫期が多雨条件に遭遇すると、湿害と病害によって作柄が極めて不安定となる。これの対策としてビニールによる遮弊栽培を行なうと、地温は対照区と3～4°Cの較差を生じ、これが根部の老化を防ぎ、株の発育にも反映し、発病や湿害が顕著に少なくなる。対照区に較べて利用茎数が多く50%以上増収し、品質の向上に役立ち、栽培が安定化する。

摘要

1) 生育中期から収穫期にかけて、平均気温が約10～20°Cの範囲内にあてはまる栽培型は、経済収量が得られ、品質がよい。平均23°C以上を越える場合は経済栽培は成り立たない。

2) 平地では1～2月上旬と、秋作で高温期を幼苗期ですごす7月蒔が安定して、その他の時期は適生せず、とくに高温期栽培は山間地に依存せねばならない。

3) 山間地では播種期の中が広く、2月上～3月中旬と5月中旬～6月中旬蒔が経済栽培期で出荷期の延長に役立つ。また高温期出荷を狙った4月蒔は標高400mではその目的は達成できない。

4) 腐散病や葉枯病などの病害は25°C以上で、しかも降雨を伴う場合に激発するが、ビニールによる遮弊はその防除効果が大きく、栽培可能期間が延長される。

5) ス入りは25°C以上の高温時に多く発現する。